

第 199 回 宝生能楽堂の近代宝生流宗家 3 像

筆者：林 久治（記載：2022 年 9 月 1 日）

（1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気促な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいたので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

武漢肺炎による自粛生活で家に籠っていると、運動不足で体重が増加するし、精神的にも圧迫を感じる。私の銅像探索は不要不急の活動ではなく、私の生存に必要な不可欠である。昨年の末には感染者数が激減し、「これで流行は終息か？」と期待していた。所が、本年になって第 6 波が到来してしまった。2 月 3 日には、日本全国の新規感染者数は、過去最高の 104,334 名に達した。しかし、これをピークとして新規感染者数は徐々に減少して、6 月 23 日には 16,670 名にまで減少した。

この頃、私は第 4 回目の予防接種を予約し、7 月 8 日に受けることが出来た。そこで、私は 7 月 16 日からの連休後に大阪に行って、孫達と遊ぶことを計画した。しかし、6 月末から第 7 波が到来して、新規感染者数が急激に増加し始めた。娘から「今月は、大阪に来るのを見合わせたら」と言われたので、残念ながら私は大阪行きを中止した次第である。その間、新規感染者数は急激に増加し、8 月 3 日には過去最高の 249,789 名にまで達した。これは、当日の世界最高値であった。

私大阪行きを予定していた 7 月の 3 連休後、3 人の孫達全員が陽性になってしまった。第 7 波は、いよいよ身近まで押し寄せて来たのであった。幸い、症状は軽く、上下の孫は 1 日だけ 38℃ の発熱があっただけで、中の孫は陽性ながら無症状であった。彼らの両親は陰性であった。丁度その頃に、私共夫婦が孫達と遊んでいれば、後期高齢者が感染するリスクがあったわけである。

一方、東京地方の猛暑は例年以上で、7 月初旬から最高気温は連日 35℃ 以上であった。従って、第 7 波と猛暑のため、私は銅像探索を自粛していた。しかし、8 月 4 日から 6 日までは大変涼しくなったので、6 日には人出の少ない新国立競技場周辺の銅像（秩父宮像、岸清一像など）を探索し、[前回の記事/f](#) にその探索記を記載した。なお、私の銅像探索記の全ては、[2\) のサイト/f](#) から閲覧出来ます。

最近、私は宝生流のサイト ([3\) のサイト/](#)) で、宝生能楽堂の 1 階ロビーに 3 基の銅像があることを発見した（図 1 下を参照）。これらは [1\) のサイト/](#) に収録されていないので、涼しくなった 8 月 28 日（日）に探索した。本稿は、今回の探索記である。本稿では、私の意見などを **青文字** で、資料の内容などを **緑文字** で記載する。

(2) 宝生能楽堂



図 1.

上：宝生能楽堂の周辺地図、本図は、[4\) のサイト/0](#)より借用。

下：宝生能楽堂の1階ロビー、本図は、[3\) のサイト/](#)より借用。



図 1 上に宝生能楽堂の周辺地図を示す。本図より、本堂は JR と都営地下鉄の水道橋駅のすぐ近傍であることが分かる。ウィキペディアや[3\) のサイト/](#)などによれば、宝生流の概要は次の通りである。

宝生流は能楽の一派。現在、観世流に次ぐ第二の規模を誇る。観世流は、観阿弥と世阿弥を芸祖とするが、宝生流の初代は蓮阿弥といい、観阿弥の子で世阿弥の弟となっている。現在の宝生能楽堂は 1978 年に完成したが、2025 年 4 月に建替えに着工し、2028 年 7 月に竣工する予定である。

宝生能楽堂は、ネット記事によれば月曜休館で営業時間は 10 時から 17 時となっていたので、私は 8 月 28 日の 10 時半頃に本堂に着いた。しかし、玄関は閉まっていた。本堂周辺を探索すると、玄関脇にある事務室の電気が点いていて、事務員が数人いた。私が事務室の窓外をウロウロしていると、一人の女子事務員が「何か用ですか？」と出て来た。私はダメ元で彼女に銅像撮影をお願いした所、快くロビー

に入れて下さった。彼女の話では「玄関は、催物がある時しか開いていない」そうである。銅像探索の際には、警備員や事務員にすぎなく断られることも少なくないが、親切に許可して下さると大変有難く、施主団体の善意が伝わってくる。

図2上には、宝生能楽堂の外観を示す。図1下には、[3\)のサイト/](#)に収録されている本堂の1階ロビーの写真を示す。広いロビーの奥に3基の銅像が見える。図2下には、3基の銅像の写真を示す。



図2.
上：



図2. 上：宝生能楽堂の外観、下：ロビーの奥に設置された3基の銅像。

(3) 近代宝生流宗家3像

親切な事務員のお姉さんが1階ロビーの3像を見せて下さった。しかし、ロビーの照明を点けてくれなかったので、銅像付近は暗く、また壁を背に設置されていたので、像背面の彫文は見えなかった。従って、3像の制作者や建立時期は不明である、以下に、3像の写真と台座正面の題字を示す。



図3. 左：十六代寶生九郎和榮先生の座像、右：本像台座の題字。

ウィキペディアなどにより、十六代和榮先生の略歴は次の通りである。

知榮（ともはる、1837 - 1917）は宝生流十六代宗家。宝生大夫・宝生弥五郎友于（宝生流15世宗家）の次男（兄は夭逝）として、江戸・神田に生まれる。明治維新後、能をやめて暫く帰農していたが、やがて宝生流を復活。維新後衰退した能楽界にあってその復興の中心を担い、初世梅若実・桜間伴馬とともに「明治の三名人」と並び称される。また多くの後進を育て、宝生流のみならず、能楽界全体の発展に力を尽くした。



図4. 左：十七代寶生九郎重榮先生の胸像、右：本像台座の題字。

ウィキペディアなどにより、十七代重榮先生の略歴は次の通りである。

重英（しげふさ、1900 - 1974）は宝生流十七代宗家。宝生嘉内の二男として京都市生まれ。実子のなかった十六代宗家宝生九郎知榮の養子となる。1903年「高野物狂」で初舞台、1909年「猩々」で初シテ。同年一家で東京に移住し、16代目宝生九郎に弟子入り。1917年18歳で宗家を継承、重英と称す。1949年17代目九郎を襲名。1954年「満仲」で芸術祭賞、1954年度芸術選奨受賞。1957年日本能楽会会員、1962年日本芸術院会員。1971年勲三等瑞宝章受章。多くの実力ある門人を育てた。1938年東京音楽学校教授、1945年能楽協会初代理事長もつとめた。子に宝生英雄（18代目宗家）。



図5. 左：十八代寶生英雄先生の胸像、右：本像台座の題字。

ウィキペディアなどにより、十八代英雄先生の略歴は次の通りである。

英雄（ふさお、1920 - 1995）は宝生流十八代宗家。十七代宗家宝生九郎重英の長男。流儀の統領となるべく生育、若年より英才の名を受ける。戦時中は軍務にあり、中国を転戦、復員後は、先代を補佐して水道橋能楽堂建設に尽力した。1974年に宗家を継承。当時懸案であった新能楽堂の建設に奔走し、1978年、現在の宝生流能楽堂を完成させた。能楽協会理事、日本能楽会会長を歴任するなど、能楽界のリーダー格として活躍、海外公演にも積極的に取り組み、普及を図った。

なお、宝生流の十九代と二十代宗家の略歴は次の通りである。

①宝生 英照（ふさてる、1958 - 2010）は宝生流十九世宗家。十八世宗家宝生英雄の長男。1995年に宗家を継承。重要無形文化財総合認定保持者。東京芸術大学邦楽科講師・日本能楽会常務理事・宝生会会長などを歴任した。2008年、病気療養のため長男の二十世宗家・宝生和英に継承。2010年4月17日、心不全にて逝去。52歳没。

②宝生和英（かずふさ、1986年 -）は十九代宗家の長男。5歳で初舞台「西王母」子方、9歳で「岩船」にて初シテを勤める。先代および今井泰男、三川泉、佐野萌といった流儀重鎮の薫陶を受ける。2008年に宗家を継承。これまでに「鷲」「乱」「石橋」「道成寺」「翁」のほか、「弱法師 双調之舞」「安宅 延年之舞」などを披演。伝統的な公演に重きを置く一方、異流競演や復曲などにも取り組む。また、公演活動のほか、マネジメント業務も行う。海外ではイタリア、香港を中心に文化交流事業を手掛けるなど、精力的に活動している。

（3）五雲の扇のいはれ

上記の3像の向かって右側に、「五雲の扇のいはれ」の説明文が掲示されていた。その写真を図6に示す。

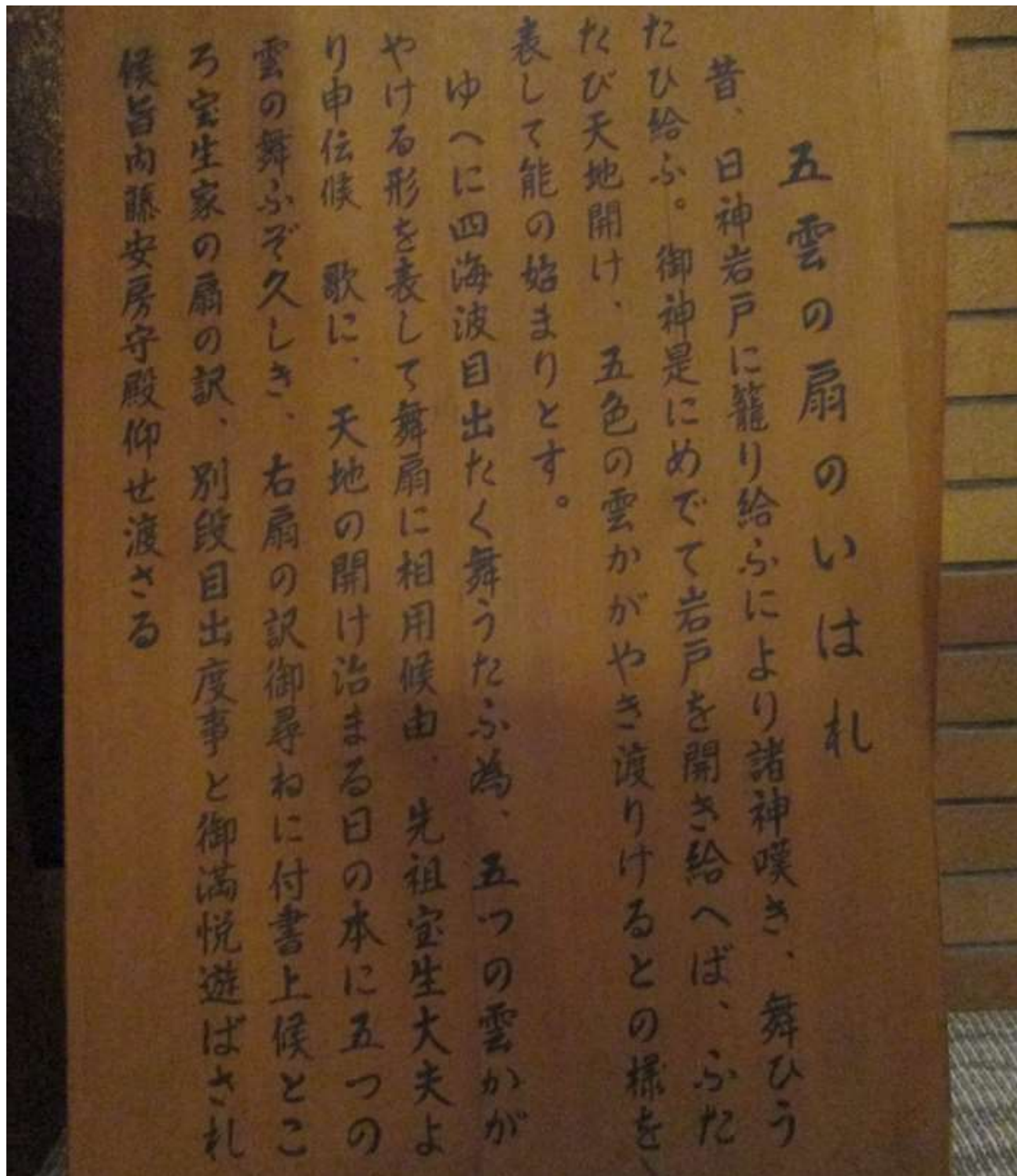


図6. 「五雲の扇のいはれ」の説明文

5) のサイト/1 は、能の扇について次のように説明している。

①能を演じるときにシテ方やワキ方が持つ「中啓（ちゅうけい）」と、仕舞や、地謡方、囃子方、後見方が使う「鎮扇（しずめおうぎ）」の2種類がありますが、仕舞や素謡などに使う鎮扇には、シテ方の流儀によって文様や作りが決まっています。

②観世流では、三段の水巻の文様、いわゆる「観世水」が描かれているのが特徴です。扇骨の顔（要の部分）も丸みを帯びてふっくらとし、両端の親骨には三つ彫りが入っています。宝生流は、「宝生五雲」という5つの雲が描かれた文様で、緘尻（どじり 扇の緘じてある方の先端）が丸く内側に巻いてあります。

なお、図6の「五雲の扇のいはれ」の説明文には、次のように書かれている。

五雲の扇のいはれ

昔、日神岩戸に籠り給ふにより諸神嘆き、舞ひうたひ給ふ。御神是にめでて岩戸を開き給へば、ふたたび天地開け、五色の雲がかがやき渡りけるとの様を表して能の始まりとす。

ゆへに四海波目出たく舞うとふ為、五つの雲がかがやける形を表して舞扇に相用候由、先祖寶生太夫より申伝候 歌に、天地の開け治まる日の本に五つの雲の舞うぞ久しき、右扇の訳御尋ねに付書上候ところ宝生家の扇の訳、別段目出度事と御満悦遊ばされ候旨内藤粟安房守殿仰せ渡さる

以上の資料などにより、近代宝生流宗家3像の概要は次の通りである。

近代宝生流宗家3像

設置場所：東京都文京区本郷1丁目5-9 宝生能楽堂1階ロビー

建立時期、制作者は不明

設置経緯：宝生流は能楽の一派。現在、観世流に次ぐ第二の規模を誇る。観世流は、観阿弥と世阿弥を芸祖とするが、宝生流の初代は蓮阿弥といい、観阿弥の子で世阿弥の弟となっている。現在の宝生能楽堂は1978年に完成したが、2025年4月に建替えに着工し、2028年7月に竣工する予定である。現在の能楽堂1階ロビーには、近代宝生流宗家の3像が設置されている。向かって左から、十六代宗家・宝生九郎知栄（ともはる、1837 - 1917）、中央は十七代宗家・宝生九郎重英（しげふさ、1900 - 1974）、右端は十八代宗家・宝生英雄（ふさお、1920 - 1995）。

なお、観世流の芸祖である観阿弥と世阿弥の銅像はそれぞれ三重県名張市と新潟県佐渡市にあり、[1\) のサイト/](#)に収録されている。しかし、近世の能楽師の銅像は宝生能楽堂の3像しかないようである。

(4) 桜蔭学園

宝生能楽堂の南側の道路（図1上を参照）は坂になっている。その模様を、次ページの図7上に示す。そこには、文京区教育委員会の案内板があった。その写真を図7下に示す。これによれば、この坂は「忠弥坂」と言うそうで、坂の上に丸橋忠弥（?-1651）の槍道場があったらしい。

忠弥坂を登って行くと、宝生能楽堂の裏手に桜蔭学園の中学と高校の校舎があった。その写真を、10ページの図8に示す。私の娘は、桜蔭学園に本郷三丁目駅から通っていた。本郷三丁目駅から本園までは、歩いて十数分かかっていた。私は今回、水道橋駅から本園までは、歩いて数分で行けることを初めて知った。なお、桜蔭学園には偉人の銅像はないようである。



図8. 上：桜蔭学園の校舎、下：桜蔭学園の玄関。

参考資料

- 1) のサイト : <https://douzou.guidebook.jp/>
- 2) のサイト : <http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf>
- 3) のサイト : <http://www.hosho.or.jp/nohgakudo/>
- 4) のサイト : <https://mapfan.com/spots/SC3AH,J,UW0>
- 5) のサイト : <https://www.the-noh.com/jp/trivia/110.html>